

弘前学院大学ティーチング・ポートフォリオ

看護学部・看護学科
對馬 明美

作成日 2024年1月30日

1. 教育の責務

2008年（平成20年）度、弘前学院大学看護学部看護学科基礎看護学領域に採用され、2013年（平成25年）度退職。その後、非常勤看護師として病院勤務。2022年（令和4年）度、弘前学院大学看護学部看護学科在宅看護論に採用され、本年（2024年）で2年となる。弘前学院大学には前回と合わせて8年在職となる。
主に在宅看護実習指導、看護統合実習、基礎看護学実習Ⅱを担当している。

2023年度担当授業

科目名	学年	授業種別	開講学期	概要
在宅療養を支える看護	2年	演習	後期	在宅療養の場、療養者と家族に応じた看護活動の現状や課題など

2. 教育の理念

数十年前、看護学生の私は学内で学んでいる講義内容がどのように看護の仕事に結びつくのかイメージがつかず勉強が全く楽しくなかった。病院実習中も看護過程が展開できず、無気力で消極的で実習に出席しているだけであった。このような私に働きかけてくれた実習指導の先生方がいた。O先生からはなぜ知識が必要なのか学修の根本について、T先生からは知識の探し方・活用方法などの学修方法や思考過程について、K先生からは内省することの大切さを教わった。O先生からは利他の心も教わった。先生方の教えは卒業後の私の基盤であり、選択に悩んだ時の判断の基準になっている。

学生達には未来がある。「これから」である。看護専門職としての知識・技術・態度の修得は必須である。同時に人間形成過程への働きかけも行い、卒業後も様々な職場環境の中で転んでも起き上がりたくましく働いていけるような生活者を目指している。

3. 教育の方法

実習指導では、まず、事前準備の徹底を目指している。実習前に実技の練習に来るよう声掛けし、学生達同士で伝達するよう促している。事前練習にきた際は、技術の手順・手技・根拠の確認の他、学生の性格やコミュニケーション能力、これまでの実習で経験したことや悩んだこと、在宅看護実習に対する事前学習の準備状況、在宅看護実習にむけての不安や期待などを情報収集し、学生との関係性の構築をしている。実習前から学生が話しやすい雰囲気を意識的に作り、実習中も学生が感じたことや考えていることを引き出すよう努めている。

実習中は、学生が目的・目標を見失わないように常に問いかけをしている。実習内容について学生が確実に学ぶことができているか確認し、学びのもれがないようにしている。在宅看護実習では、同行訪問中、教員はその場にはいない。よって、同行訪問前後の訪問看護ステーション内で学生との対話を特に大切にし、同行訪問での経験を言語化する機会を意図的に作っている。学びの質が「知った」レベルでとどまらないよう、「その場面から何を学んだのか」を問いかけている。「気づき感じ考えた」レベルで記録できている場合は、自分だけの学びにならないようカンファレンスで他学生と共有するよう促している。

4. 教育の成果

在宅看護実習の評価表の評価基準は、一人で出来る・1回の助言で出来る・数回の助言で出来る・助言を受けても出来ないの4段階である。訪問看護ステーション実習最終日、学生は実習評価表に評価点（10・8・6・0または5・3・2・0）に○とその根拠の記入、実習を通しての自分の変化や実習で得たことなどを自由に記載し、午前中に教員がその自己評価の確認をしている。教員側で助言をしていたが、学生の自己評価では「一人で出来る」になっている場合がある。助言されたことが記憶になれば、いくら助言したと伝えても納得しないまま修正することになるため、助言は口頭だけでなく文字で残し可視化している。また、自己評価点の根拠の記載内容により、評価項目を理解した上で自己評価しているのか確認できている。さらに、教員確認後、学生が担当指導者に評価の記入をお願いし、同行訪問中の援助や態度についての評価をいただいている。

2022年度、担当した学生の平均点は82.1点（90～67点）であった。2021年度に担当した学生（4年生前期のみ）の平均点は79.3点であった。

5. 教育の改善

実習開始1週間前からは実習室へ技術の練習に来てほしいが、他領域の実習中であつたりし在宅看護実習に向けての技術練習の時間が確保できないのが現状である。在宅看護実習では実習中に経験した看護技術について記録物としてチェックし提出することにしていく。しかし、在宅看護実習前の他領域実習での技術の修得状況の詳細については把握できていなかった。よって、他領域でどの技術をどのように学んで経験したか「看護学実習要綱」の「看護師教育の技術経験の有無チェック表」を用いて確認し、在宅看護実習前後での経験と成長を可視化させたい。

6. 教育の目標

評価点数について80点以上を維持したい。

80点以上維持するためには、まずは、これまでの実習の蓄積や予備知識、事前練習など学生自身の準備状態による。各領域での実技経験が積み重なっていることを期待し、継続させたい。

臨地実習中は、1回で学生が理解できるような助言を目指したい。そのためにも、学生の性格や準備状況について事前（最低でも実習初日のオリエンテーション時）に把握することは継続する。実習現場で、論理的思考やアセスメントの思考過程ができていない学生に対しどのように助言をすれば理解がスムーズに得られるか、学生の記録を読んで私自身の考えを整理するのに時間を要したので、改善したい。

【資料】

1. 看護学実習要綱